



No. 35

平成28年3月11日
発行 多治見市教育研究所

URL

<http://school.city.tajimi.lg.jp/kyoiku/>
本誌は、多治見市教育研究所ホームページ上でもご覧いただけます。



M君の夢

多治見市小中学校長会 会長 笠原小学校長 樋口 一成

10年ほど前に赴任したある小学校に、3年生のM君という男の子がいました。M君は校長室に一人でよく遊びに来て話をします。話の内容は、友だちが自分の真似をしながら追いかけて来るので嫌だという話やテレビの話でした。

友だちに追いかけられた時にはどうするか。M君は自分が壁に背を付けて小走りで逃げると、その子も真似をして追いかけてくる。でもその子は壁との摩擦でスピードが落ちるので自分は逃げやすいんだと話します。ある時はテレビの話で、プロジェクトXの最新医療について解説してくれました。「じゃあ、M君は将来、科学者かお医者さんかな。」と言うと、「そうですね。ぼくは科学者かな。」と答えるのです。M君の話を聞きながら、すごい子だと思う反面、同じ3年生とは話が合わないわけだと思いました。

そのM君のことで経験豊富な担任のE先生がとっても悩んでおられました。M君は他の子とのトラブルがよくあり、直ぐにカッとなり、時にはイスを高く持ち上げて投げつけるといったことをするので、学級が落ち着きません。周りの子はよけいにM君を焚きつけていじめるのです。宿題をやってこないこともよくあり、お母さんに相談されていました。

お母さんはM君を厳しく育て、宿題を忘れる原因は予定帳を書いていないからだ、と、夜、学校へ連れてくると、先生に断って、真っ暗な教室へ一人で行かせるのです。もう書けただろうという時間になってもM君は戻ってきません。

ある日、E先生が校長室へ来て、M君には発達障がいがあるのではと、資料を見せながら説明されました。その後、検査をし、やはり障がいのあることが分かりました。予定帳が書けないのはそのためでした。お母さんは学級懇談会で涙を流しながら、これまで我が子が大変迷惑をかけてきたことを詫びるとともに、他のお母さんたちに障がいに対する理解を求めました。M君のお母さんは、それまでのスパルタ教育をやめ、E先生も配慮をされるようになり、半年ほど経つとクラスでのトラブルも減り、ずいぶん落ち着いてきました。

それから6年後、中津川市でサマー・サイエンス・スクール（SSS）が開かれた時のことです。SSSには全国から優秀な中学生が集まり、超一流の講師から科学の授業を受けます。その開会式に来賓として招かれたノーベル化学賞を受賞された野依良治氏と私は同席させていただきました。挨拶をすると、目の前でM君がにこにこしながら私の話を聞いてくれました。6年前に校長室に来てよく語ってくれたM君のことを思い出し、私は涙を止めることができませんでした。



平成27年度 多治見市教育実践論文【一般の部】最優秀賞

誰もが「できた」「わかった」「もっとできるようになりたい」を実感する授業作り
～ユニバーサルデザインの国語科学習のあり方～

多治見市立北陵中学校 教諭 加知 昌彦

1. 主題設定の理由

現在、通常学級にも6.5%程度、在籍すると言われる支援の必要な生徒。本校の掲げる『『できた』『わかった』を実感させる授業づくり』や、多治見市が推進する「ユニバーサルデザインの授業」の具現をめざし、発達障がいの可能性のある生徒の通常学級での学びという側面から実践を試みた。支援を必要とする生徒の学びから、すべての生徒にとって分かりやすい授業を考えてみた。

2. 研究仮説

研究主題を達成するためには次のような要素が必要であると考えた。

支援の必要な生徒に対して、螺旋的な指導を継続させていくための実態把握と学習指導計画づくりを行うこと。

支援の必要な生徒を中核に据えながら、どの生徒にとっても「できる」「わかる」ための指導・援助を行うために「導入」「展開」「終末」の学習過程での活動を工夫すること。

生徒自身が「できた」「わかった」という思いをもち「もっとできるようになりたい」と実感するような評価活動の工夫である。

本実践では「生徒からの授業評価」を取り入れながら、生徒にとって分かりやすい学習活動の構築をめざし、以下の研究仮説を設定した。

単元や単位時間の指導に当たっての生徒の実態づかみのあり方を考え、支援の必要な生徒に対しての指導・援助の工夫を行い、支援の必要な生徒をはじめ、学習者への効果を確かめる評価活動の工夫を行えば、「できた」「わかった」「もっとできるようになりたい」を実感する生徒が育つ

3. 研究内容

(1) 研究内容 I

支援の必要な生徒の実態をつかみ、意欲化を図る工夫

研究内容 I では生徒一人一人が主体的に学習活動に取り組むことができるように「単元での学習内容(単元を貫く課題)」、「付けたい

力(試したい力)」それぞれの単位時間の「中心となる学習内容」を示すようにして、生徒の課題意識を連続させることができるようにした。主に、以下のような実態をもつ生徒への支援として行った。

- 見通しをもつことで安心して活動できる生徒
- やることが明確であれば主体的になれる生徒
- 目的意識があることで成果が実感できる生徒

①ガイダンス機能を活かした指導計画の工夫

学習者の誰もが単元の流れを理解すると共に、学習計画を知る中で「何が」「どこまで」できるようになりたいか、という願いをもつことができるようにした。こうすることによって、「単元の学習内容(単元を貫く課題)」「どの時間に何を学ぶのか」「どんな力を付けていくのか」ということ、「単元に伴う主な言語活動(単元を貫く言語活動)」が生徒に伝わり、見通しをもって学習に取り組むことができるようになった。

②単元で身に付けたい力をつかむ工夫

単元の導入時には既習事項の定着度や、生徒自身の学習に関する願いをとらえる機会をもつようにした。単元の学習に対して課題をもち、その課題を克服していく姿は周りの生徒達にとっても良い効果を与え、「共に学んでいく意識」をさらに醸成させていくことができた。

③意図的な単元の構造化

読むこと(3年生)「握手」では、読解の学習の後に作者である、井上ひさし氏の作品を紹介し、読書に親しませる機会をもち、「ABセット方式」を取り入れ、文字を読むことが苦手な生徒に本を読ませる機会を位置づけるようにした。作者の作風をさらに理解する機会をもてたことと、「故郷」における同様な学習構造の試しを行った。「入れ子方式」は古典の和歌の学習において同じ作者の作品や同じ和歌集の中に収められている和歌に触れることで学

習に広がりをもたせるようにした。

(2) 研究内容Ⅱ

支援の必要な生徒に対しての指導・援助の工夫

研究内容Ⅱは「導入」「展開」「終末」の「3つの『見届ける』」といった視点での指導・援助の場における実践である。主に以下のような実態をもつ生徒への支援として行った。

- 集中力が持続すれば学習に打ち込める生徒
- 褒められることで意欲が増し、活動する生徒
- 興味関心を抱けば、その教科が好きになる生徒

①国語科学習への意欲化を図る工夫

「もっとできるようになりたい」を支える導入の工夫
既習事項や基礎的・基本的な内容の定着を図りながら、どの生徒にとっても自己肯定感が得られる学習場面を生み出そうと実践に努めた。

ア タブレット端末を活用した「月の別称」「熟字訓」など語彙の獲得対策用フラッシュカード

イ 語彙力・文学史等の知識理解を深める各種カルタ
・ 故事成語 ・ 部首 ・ 四字熟語
・ 文学史カルタ

②「できた」を支える展開での工夫

ア ワークシートと板書の一体化を図る工夫

イ 文字の大きさや色遣いへの配慮

③視覚支援に留意したICT教育の導入

④「ソーシャルスキルの育成」に根ざした「アクティブ・ラーニング」への誘い

⑤自己・相互評価力を身に付けさせる工夫

これらの指導・援助を行うことで、支援の必要な生徒をはじめ、「できた」「わかった」「もっとできるようになりたい」という思いを一人一人にもたせることができた。

(3) 研究内容Ⅲ

「できた」わかった」を実感させる見届ける工夫

研究内容Ⅲではすべての学習者への効果を確かめる評価活動の工夫を行った。生徒づかみ→指導の実際→効果・生徒自身の実感→更なる生徒づかみへと、的確な指導・援助を行えるようにした。

①評価を継続的・累積的にとらえる工夫

「生徒の学習に対する興味・関心」「学習前の知識・技能の定着度」を表にまとめ、単元の

導入時での自己分析と、同じ領域での学習状況の見届けから変容をつかむようにした。単元の学習後には、生徒がどの座標に推移していったか、ということをとらえるようにして、視覚的に学習後の生徒の変容がつかめるようにした。

②「生徒にとっての学びやすさ」をとらえる工夫

支援の必要な生徒にとって分かりやすい学習活動は、誰にとっても分かりやすい、という視点に立って生徒からの授業評価を取り入れた。学習者・指導者が一体となり、学習を創り出していくことができた。なお、これらの取組は主に以下のような実態をもつ生徒への支援として行った。

- 自己肯定感、自尊感情の低い生徒
- 褒められることで意欲が増し、活動する生徒
- 興味関心を抱けば、その教科が好きになる生徒
- 自分の学びに自信をもてないでいる生徒
- 国語の学びに対して特に自信のない生徒

生徒の変容を数値と共に「できた」「わかった」「もっとできるようになりたい」という実感をもった言葉、しぐさ、表情をとらえることができた。

4. 成果と課題

○生徒の願いや実態から、学習を構築したことで願いの達成や伸び、一人一人の学びの特性を理解しながら「できた」「わかった」「もっとできるようになりたい」という思いを支えることができた。

○単位時間の指導・援助を具体化し、「誰にとっても分かりやすい授業」の中で国語の力を獲得させることができた。

○願いや実態、学びの成果を数値化したことで「できた」「わかった」の実感や教師の指導改善の視点を明確化することができた。

●個々の生徒が抱える「学びにくさ」をさらに的確にとらえ、指導・援助に生かすこと

●国語科学習を通して、「誰にとっても」という汎用性を更に考えていくこと

平成27年度 多治見市教育実践論文【新人の部】最優秀賞

自ら「高まり」、仲間と「高め合う」子の育成を目指した国語科学習

多治見市立精華小学校 教諭 伊藤 瞳

1. 主題設定の理由

児童の多くは文の大まかな要旨を捉えたり、自分の考えをもったりすることができる。しかし、個人追究の場では課題に迫る言葉に着目することができない姿や必要以上に長く言葉を書き抜く姿が見られた。また、交流活動の場では決まった児童しか自分の思いを述べようとしない姿も見られる。

そんな児童の実態を考慮し、「個人追究、グループ交流などの一単位時間の学習過程」の工夫があれば、自ら「高まり」を求めて学んだり、仲間と「高め合う」ことのよさを味わいながら学ぶことができたりする児童の育成につながると考えた。

そこで、研究主題を『自ら「高まり」、仲間と「高め合う」子の育成を目指した国語科学習』と設定し、2年間にわたって実践を行った。

2. 研究仮説

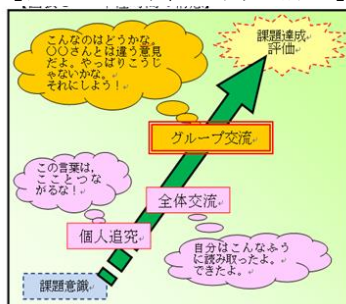
説明的文章の学習で、個人追究でのノート指導やグループ交流の仕方、振り返りの場の設定等の一単位時間の学習過程を工夫すれば、「高まり」を求めて自ら学んだり、仲間と学ぶ楽しさやよさを味わいながら「高め合い」を実感できたりする、児童の育成につながる。

3. 研究内容

児童が授業を通して、「高まり」「高め合う」ために一単位時間の学習過程を(図1)のように構想し、以下の3点を研究内容として設定した。

- (1) 個人追究での構造的なノート指導の工夫
- (2) グループでの交流活動の工夫
- (3) 自分の高まりを振り返る場の設定

【図1 一単位時間の構想】



4. 研究実践1

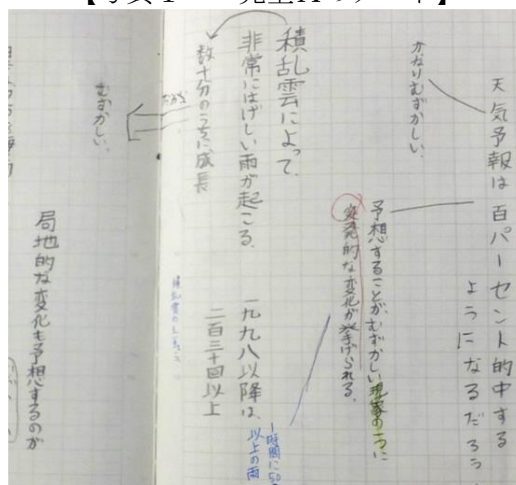
小学校5年生『天気を予想する』

(1) 個人追究での構造的なノート指導の工夫
文章の構成をつかみ、筆者が何を伝えたいのか読み取ることができるように、大切な言葉や課題の答えとなる言葉を短く抜き出し、矢印や記号を使いながら整理してノートに書かせることを指導した。また、読み取るポイントを示した掲示や、仲間のノートから学べるプリントを作成し、指導した。

6月から継続して指導をし、一つの言葉からいくつも言葉に関連付けてまとめる児童が増えた。さらに、対照となる言葉を比べるようにノートに位置づけて書く児童の姿が見られた。

【写真1】ノートを構造的に整理して書くことで、正確な内容理解や段落構成の工夫に気づき、効果的であった。

【写真1 児童Aのノート】



(2) グループでの交流活動の工夫

考えを伝え合う活動形態として3～4人の小グループを編成し、全員が自分の考えを伝え合う場を設定した。筆者の説明の工夫について、掲示や前時までの学習から仲間と考えを出し合い、意見を練り合う姿につながった。また、交流活動で意見を練り合うことに喜びを感じている児童の姿も見られた。しかし、交流している内容に具体性がないことがあったため、自分の体験を述べる等、具体的な内容の交流活動にしたい。

(3) 自分の高まりを振り返る場の設定

振り返り用紙を作成し、単位時間ごとにねらいを達成できたのか振り返られるようにした。

書き出しに戸惑うことがないように、書き出しを印刷した短冊プリントを用意し、キーワードを使って書くように指導した。すると、キーワードを活用してまとめを書く児童の姿が定着し、仲間の意見から自分の考えを広げたり、深めたりできるようになった。

5. 研究実践2

小学校6年生『時計の時間と心の時間』

(1) 個人追究での構造的なノート指導の工夫

前実践から継続してノート指導や掲示等での指導を行った。また、個人追究で困っている児童には読む手助けとなる言葉や段落の最初の文に着目できるようにマーカーを引き、読み取らせるように工夫した。すると、視覚的に捉えやすくなり、スムーズに個人追究に取り組める児童の姿が見られた。

(2) グループでの交流活動の工夫

研究実践1の結果を受けて、読み取ったことをもとに、自分の体験を交流する活動を仕組んだ。筆者の意見や事例に納得できるか、その理由を具体的に自分の体験を交えて話すようにした。その際、(図2)のような話型を提示して話し方の指導をした。

【図2 グループ交流での話型】

私は()段落の筆者の()という考えに納得[しました。/しませんでした。] どうしてかという、()という経験をしたことがあるからです。

すると、(図3)のC1のように自分の体験や経験と結びつけて話すことができ、具体的な内容で発言できる姿につながった。また、C2のように疑問に思ったことに対して自然と質問し、仲間の意見を聞いて高まろうとする姿が見られた。

【図3 グループ交流での児童の会話】

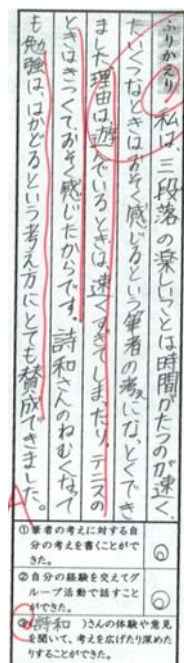
T:「筆者は3つの事例を挙げて自分の意見を述べていたね。筆者の考えに対して、みなさんはどんな経験をしたことがありますか。」
～グループ交流
C1:「3段落の筆者の楽しいことだと時間がたつのが早いという意見に納得して、いい授業だと時間があっという間に過ぎて、もう終わりだと感じたことがあるからです。」
C2:「いい授業ってなに?嫌なのはあるの?」
C1:「嫌なのは社会。人がいっぱい出てくるから覚えられんもん。」

(3) 自分の高まりを振り返る場の設定

研究実践1を踏まえて、振り返りの短冊プリントには、授業内容と仲間からの意見で「高まった」ことの2点だけを記述するようにした。研究実践1では書き出しを揃えたが、書き出しを揃えなくても内容的に不足することが無か

ったため各自で書かせるようにした。

すると、仲間の意見を聞いていないとまとめを書くことができないため、より「高め合おう」とする姿につながった。また、自分の意見と比較しながら聞く児童の姿が増えた。



6. 結果と考察

研究実践1～2で継続したノート指導を行ったことで、児童自身が構造的なノート作りのよさを実感していることから、「高まり」のある学習につながっていると考えることができる。

また、個人追究で「高まり」、グループ交流で「高め合う」ことができた反面、自分が仲間と交流したことでのように「高まった」のか「高め合えた」のかがはっきりしない場面があった。

「高まり」「高め合う」ためには具体的に自己評価ができるような振り返りにつなげる必要があると考える。

7. 成果と課題

- 構造的なノート指導をすることで、内容の整理ができ、思考がまとまることにつながった。
- 多様な意見に触れることで、仲間と学び合うことのよさや楽しさを感じて学習することができた。
- 仲間の発言を受けて確信したり、新たに発見したり、考えが変化したりするなど、「高まり」「高め合う」変容を自覚することができた。
- ▲ グループ交流で示した話型にとらわれ過ぎてしまう児童の姿があった。
→話型指導も段階的に指導したり、工夫したりする。
- ▲ 授業中での「高まり」「高め合う」姿が自覚しづらいことがあった。
→発問を精選し、「高まり」「高め合う」ための明確な自分の変容を振り返る場の設定をする。

成果と課題から、今後も研究実践を続けていきたい。

平成27年度 多治見市教育実践論文【幼稚園の部】優良賞

遊び・栽培・調理を通した食育～幼児の豊かな心と体を育む食育～

多治見市明和幼稚園 教諭 森本 早紀

1. 研究テーマ設定理由

子ども達の給食風景を見ると、その実態は好きな物だけを食べる子、「これ、何？」と食べ物の名前を知らない子、「硬くて食べられない。」と残してしまう子が多かった。子ども達が楽しみにしている給食をより意欲的に自ら進んで食べられるようにするために幼稚園での遊びや栽培・調理の一連の活動が食べ物への興味・関心を高めると考え、このテーマを設定した。

2. 研究仮説

子ども達には食べ物への興味・関心が高められるような経験や遊びを充実させることが必要である。食べることへの意欲につなげるために①知識①体験③活用の3点を意識し、研究を進める。

3. 実践内容

【知識】身近な食材への興味・関心を高める活動

(1) いきいき遊び

野菜カードを使って野菜の名前や色、形を知ることができた。子ども達にとってなじみのない野菜の名前は言える子が少なかった。しかし、毎日繰り返し行うことで野菜の色や形などの特徴をよく見るようになった。

(2) 給食指導

給食センターの栄養士の方が園訪問をし、給食のできる過程や食物の役割についての指導を受ける。「野菜を食べると風邪を引きにくくなる。」などと教えてもらうことで、自分から食べようとする姿が変わっていった。

【体験】栽培・調理体験

(1) オクラの栽培・収穫

オクラのでき方や育ち方を知らない子が多かったが、水やりをしながら世話をし、日々の生長を楽しみにしていた。観察をしながら食べ頃を知ったり、食べてみたいという意欲がもてるようになったりした。

(2) カレーパーティー

年長児が作ったカレーを食べながら「カレーが作れるなんて年長さんってすごいな。」と年長児への憧れを強くした年中組だった。



(3) 焼き芋大会

たき火を作って焼き芋を焼くことは家庭ではなかなかできない経験で、子ども達も目を奪われていた。中にはさつまいもが苦手で躊躇する子もいたが自分達で育て、作ったものということもあって食べてみようとする姿があった。

(4) 栗きんとん作り

お菓子屋さんになったつもりで責任感を持ち、丁寧に作ろうとする姿が見られた。また、異年齢児にも配ることを意識して、どうしたら喜んでもらえるかを子ども達なりに考え、はりきって作ることができた。

【活用】栽培物を活かした遊び

(1) オクラスタンプ

栽培したオクラを使ってスタンプ遊びをした。星形を使って花に見立てたり、並べて楽しんだりする姿が見られた。

(2) ジャがいも畑の壁面制作

ジャがいもを収穫する経験を遊びに取り入れることでより知識を深めることができるのではないかと考え、造形遊びをした。

① 土作り

(絵の具遊び)

② 葉作り

(手型スタンプ遊び)

③ ジャがいも作り

(新聞紙遊び)



土の部分に無造作に貼る子もいれば、収穫のことを思い出し、茎の近くに並べて貼り、忠実に表現する子もいた。身近な体験を遊びに転換することで、また、違った喜びを味わうことができた。

4. 成果(○)と課題(●)

- いきいき遊びを通して野菜の名前が言えるようになるだけでなく、食物の知識や食べることへの関心につなげることができ、意欲が高められたのではないかと。
- 栽培から収穫までを経験することで生長を間近で見たり、感じたりすることができた。
- 栗きんとん作りや焼き芋大会で子ども達が関わる工程は簡単で年中児でも取り組みやすく、初めての調理活動として適していた
- 育てた野菜を素材にして遊びの中で活用することができた。
- 遊びを通して食べ物に親しみを持ち、苦手でも食べてみようとする気持ちももてるようになった。
- まだ給食で初めて出会う食材に抵抗感がある子がいる。保育者の言葉掛けや環境を工夫し、進んで食べられるように継続的に援助していくことが必要だと感じる。
- 栽培した野菜に限らず食に関する遊びを今後も取り入れていきたい。
- 子どもの実態を捉えた上で一年間の栽培・収穫・調理計画を立てることが大切である。

平成27年度 多治見市初任者研修の報告

本年度3回目、4回目の初任者研修を、下記の日程で行いました。

《第3回:12月16日(火)》

- ①脳活学習研修:教育研究所
- ②人権研修:くらし人権課
- ③接遇研修:市民課
- ④生徒指導研修:教育相談室

《第4回:1月19日(火)》

- ①普通救命講習:南消防署
- ②PTA活動研修:市PTA連合会
- ③特別支援教育研修:教育相談室
- ④副教育長講話・研修のまとめ

《初任者のふり返り》

○脳活学習研修

授業前の2分間、冊子を使った漢字の書き取り練習をしている。今回教えていただいたカードやiPadを活用し、「脳活学習」を取り入れることで、授業の導入の雰囲気を作ったり、より集中し効果的に漢字を覚えたりできるような工夫をしていきたい。(多治見中:狩野愛乃)

○人権研修

子どもの人権を守るということは、全ての発言や行動を受け入れ、わがままも許すことではない。自立した社会性のある大人に育てるために適切な指導をしていくことだ。子どもの自己肯定感を高めるには、まず子どもをよく見て良さを認めることが大切だと分かった。

(陶都中:丸山晴子)

○接遇研修

保護者の方の多くが不安を抱えながら学校を訪れていると思う。おもてなしの心を持って接することで、少しでも安心感につながり、生徒について一緒になって考えることのできる関係を築いていきたい。人と良い関係を築くためにも、まずは自分から接遇の意識を持って行動したい。

(陶都中:太田郁美)



○生徒指導研修

生徒指導の一番の目的は、生徒自身の自己指導能力を高めることである。自分で正しい判断・認識をし、自分で決めて行動できるようにする。そのためには、意図的に自己決定の場や、自己肯定感・自己存在感を与えることが大切である。教師と保護者が一緒に考え、一緒になってその子にかかわっていくということが大切なのだと学んだ。

(北陵中:奥村真由)

○普通救命講習

胸骨圧迫やAEDの効果的なやり方を学ぶことができ、救命処置の一連の流れを身に付けることができた。命が助かる可能性は、1分で一割下がると言われており、現場で救命処置を速やかに行うことの大切さを改めて実感することができた。

(協之島小:木村薫)



○PTA活動研修

私は、電話で保護者へ生徒の学校での様子を連絡するようにしている。どちらかという、問題行動などの良くないことについて電話をすることが多い。もっと生徒の頑張りを伝える電話を増やしていきたい。そして、子どもが成長できるように、保護者と協力していきたいと感じた。

(小泉中:高原佑典)

○特別支援教育研修

落ち着きがないというのは、「見方」を変えれば「活発な生徒」である。確かに「誰よりもエネルギーをもっている生徒だな」と考えることができた。すると不思議と「あの生徒の力を高める手立てはないかな」と心をワクワクさせて考える自分がいた。褒めることを繰り返せば、生徒にも自信になり、よりよい成長をしていくはずだ。少しずつ自分の中にある「見方」を変えていきたい。

(小泉中:石原文太)

4回の市初任者研修を通して、14の講話や演習を行ってきました。7名の初任者は、毎回大変熱心に研修に参加し、回を追うごとに、教師としての責任感を強めていきました。

副教育長の講話にもあった「児童生徒と向き合う」というその意味を、「個の理解」というその中身を探究しながら、これからの長い教師生活を有意義に送っていただきたいと思います。

土曜学習「わがまち多治見大好き講座」

第7回「美濃焼博士になろうⅡ」 第8回「多治見子ども議会」 第9回「地元の名人に学ぼう」より

12月は、前回の講座で大勢の申し込みがあった「美濃焼博士になろう」をもう一度計画しました。寒い時期でしたが、多くの申し込みがあり、抽選で40名の児童・生徒が参加今回も大勢の美濃焼博士が誕生しました。



1月の講座「多治見子ども議会」では、市役所の仕組みと市議会の役目についての学習、本庁舎の見学、そして、議場での議会体験をしました。普段は見られない議長室、市長室、議会事務局、来賓応接室等を見学し、市長さんや議長さんの椅子にも座らせてもらいました。



議場では、全員が演壇に立って発表した後、8名の子の質問に、市長、副市長、各部長ら市の執行部の方々が通常の一般質問同様、答弁をしてくださいました。子どもたちからは、「普段の議会がどんなふうに行われているか分かった。」という声や「自分の住む市のことを考えさせられる機会となった。」という声が聞かれ、どの子も貴重な体験をしました。



2月に行った本年度最後の土曜学習、「地元の名人に学ぼう」では、94名の児童・生徒が、昔からの遊びに挑戦。お手玉遊び、和凧づくり、囲碁、将棋の中から三種類の遊びを体験しました。短い時間でしたが、家に帰って「楽しかった。」と報告した子が多く、「将棋がやりたいと言い、何十年かぶりに本将棋を子どもとやりました。」という家庭もあったようです。



本年度の土曜学習は、合わせて996名もの申し込みがあり、708人の児童・生徒が参加しました。多治見市の文化や伝統、多治見市のために働く人の思いなどが学べる機会になったのではと思います。私達教員も地元のことを知り、子どもたちに伝えていかなければならないと強く感じました。

最後に、本講座実施にあたっては、様々な方々に講師をお願いし、各学校にも、大変なご協力をいただきました。ありがとうございました。